美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2015 January/February
TAKE FREE
NO.27

特集
庄内の小正月

庄内憧憬
馬場あき子 歌人

Cradle 1
美しくなつかしい、日本をのせて。
［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌
2015 January/February
平成27年1月1日発行（隔月奇数月発行）第5巻3号（通巻27号）
発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／以東岳

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

私の黒川

馬場あき子

王祇様と一体のもどき神である「翁」の祈りは「天下泰平　国土安穏」。それは今日もなお自然の恵みに感謝し、自然と調和しつつ生きる人々の大切な祈りでもあるのだ

年々雪が来るのが早くなっている。庄内の黒川地区では、仲村の杉木立の中に鎮まる六所神社の「霜月十五日の祭り」が新暦十二月十五日に行われるが、昔のように根雪が降ったのではあるまいかと思いやられる。

私が黒川の人々と黒川能に出会ったのはもう四十年も前のことだが、つい先年、家族から雪中の王祇祭は危ないからと禁足を申し渡されてしまった。思えばよくも通ったものだ。

しかし雪を見るとやはり黒川の王祇祭の祈りの心と、折り目正しい「お栄酒」の座や、神社で観るほろ酔い気分の能の楽しさがよみがえってくる。すると、ポン、ポンポン、ポン、ポンポンという三番叟の明るい鼓の音や、澄んだ稚児の寿詞の声が聞こえてくる。賢く元気な稚児を眺めて黒川の神は笑らぎ喜び、人々は王祇祭の酒に酔うよろこびの中で、「高砂」や「難波」「三本柱」というようなめでたい能狂言を観ながら新年がやってきたことを実感し、仕事の手順なども考えるのだろう。

一夜に五、六十センチは楽に積もる庄内の雪の凄さに驚きながら、それをものともせずその条件の中でくらし、働いている人々に感動した。降りたての雪はふわっと軽く、踏みしめると意外にしっかりした踏みごたえがある。

そんな雪を踏んで一時間ほどの散策を楽しんだり、車に乗せてもらって吹雪を衝いて松ヶ岡開墾地の旧跡を訪れ、熱い珈琲を飲んだり、朝日村の大雪に揺れる吊り橋を渡ったり、腰までの雪を漕いで羽黒の五重塔に献杯しに行ったり、庄内浜の圧倒的な波しぶきを浴び、くらげ水族館の妖美に眩惑される等々、思い出す場面はあまりに多い。

春は赤川の桜を楽しみ、夏は月山に登った。白鳥が飛来する晩秋の川、そして独特な稲架の並ぶ光景も忘れがたいが、今はその風俗も消えてしまった。ずいぶん昔から庄内に馴染んでいたのだなあ、と思う。そして最後に黒川の「どんがら汁」だ。これは毎年冬、王祇祭の頃に供される鱈汁である。一卓を囲んで酒がまわった頃、まるで一味同心の友誼を味わうように、鱈のすべてを投げ込んだ味噌仕立ての汁を火を吹くようにいただくのである。

こんな思い出を綴るうち、一番大切な、黒川の王祇様について書くのを忘れてしまった。それでいい、と王祇様はおっしゃるだろう。王祇様と一体のもどき神である「翁」の祈りは「天下泰平　国土安穏」と、平穏なくらしの永続を祈る言葉に集約される。それは今日もなお自然の恵みに感謝し、自然と調和しつつ生きる人々の大切な祈りでもあるのだ。

ばば・あきこ／歌人。1928年、東京生まれ。昭和女子大学卒業。在学中より短歌を窪田章一郎に師事。能を喜多実に学ぶ。29年にわたって中学と高校の教職に就く。現在、歌誌「かりん」主宰、朝日歌壇選者、芸術院会員。2013年、第二十歌集『あかねあを』を刊行。評論は『鬼の研究』他多数。新作能に『額田王』他。賞歴は読売文学賞、毎日芸術賞、朝日賞、現代短歌大賞などがある。

2月1日早朝、王祇おろし（写真提供＝公益財団法人 黒川能保存会）

特集 | Special Edition

庄内の小正月

旧い暦の名残の「小正月」は、農作業の予祝行事として、農村を中心に行われてきました。地域や家々で今も続いている小正月行事には自然と祈りを大切にしてきた「民」としての人々の姿があり、地域古来の願いを映し出しています。

〈写真提供〉
佐々木吉治（p8～9）、渡会光廣（p11）、庄内町観光協会（p10～11）、
東海林晴哉（p12）、遊佐町教育委員会（トビラ写真、p13）、清川蹇の神保存会（p14～15）

特集 Special Edition

庄内の小正月

酒田市

旧阿部家の小正月

〈お話を伺った方〉
「旧阿部家の四季を楽しむ会」会長 **長谷部善也**さん

暮らしが自然とともにあった時代、小正月行事は豊作や無病息災を切実に祈願するものでした。時代とともに人々の暮らし方が変わっても、変わることない願いがここにありました。

人の力が頼りだった時代。昔の農家のお正月は米調整を終えた小正月が本番。

パチパチと炭火が音を立てる土間の囲炉裏で暖を取る大人たち。座敷からは、「梨団子作り」に夢中になっている子どもたちの笑い声が聞こえてきます。

庄内が雪で白く覆われる2月。酒田市南平田地区の旧阿部家では昔ながらの小正月行事が30年近く続けられています。「私がたが小さい頃はどこの家でもやってだの。この辺りは農家がほとんどで、1月1日の大正月までに米の調整が終わらねど新米で餅がつがんねわげだ。昔の農作業は人力だから、遅い家だど米の調整が1月半ばまでかかっての。だから15日から20日までの小正月は気持ちもゆっくりして祝ったもんだ」と教えてくださったのは「旧阿部家の四季を楽しむ会」会長の長谷部善也さんです。

（上）藁と豆殻の束を稲の苗に見立て、雪上に植える「雪中田植え」。（下）家族が一年丈夫に過ごせるように願う「廿日灸」は個々の願いに応じて頭から足へあてていく。

旧阿部家は元禄3（1690）年建造の酒田市指定文化財。代々、肝煎（きもいり）役を務めた由緒ある家柄で、江戸中期以降の人々の生活を今に伝える趣深い古民家です。その保存と活用のため、昭和61年に発足した「旧阿部家の四季を楽しむ会」には地元有志60名余が賛同。町の方針も文化財として一般公開するだけでなく、子どもたちの社会教育の場としての活用を目指し、冬のイベントとして「旧阿部家の小正月行事」を復活させました。

自然とともに生きる厳しさと喜びを伝える小正月行事。

毎年2月11日に行われる「旧阿部家の小正月」は、早朝の若水汲み行事から始まります。新米で新年を祝う「餅つき」、豊作への願いを込めた「梨団子作り」と「雪中田植え」。12個の御霊飯の割れ具合で新年の天候を占う「御霊様」、1年間丈夫で過ごせるよう願いを込めてお灸を当てる「廿日灸」など、一つ一つ昔のままのやり方で行っています。

悪病災難を塞ぐために塞道の神様を祀る「かまくら参り」、願い事を書いた紙を笹に付けて燃やす「塞道（さいどう）焼き」など、火を燃やしたり、餅をついたりする機会の少ない子どもたちは興味津々。「どの行事も豊作祈願が中心になった神事だけども、子どもたちにとっては神様を尊ぶことを遊びも兼ねて理解するような行事だったんです」と長谷部さん。行事の合間には小正月の話を聞いたり、せんべい釣りや竹スキーなどの昔遊びを地域の方々に教わりながら楽しみます。

小正月は昔から、農作業にちなんだ農耕儀礼として行われてきました。現在、県内ではほとんど見られなくなりましたが、農業を営む人々が年初に想う願いは昔も今も変わることがありません。その願いの原点を思い起こさせてくれる小正月は、受け継いでいきたい農村文化の一つといえるでしょう。

文＝土門かおり

豊作を願い、水木の枝に紅白の餅団子をつける梨団子作り。小正月は子どもたちには楽しくて貴重な体験。

新たな年の豊作祈願、家族が丈夫に過ごせるようにと願う小正月行事。「子どもたちは、神様を尊ぶことを遊びも兼ねて理解するようなものだったんです」。

2015年行事日程

日時 2月11日（水・祝） 10:00開会

場所 午前は餅つきと梨団子作り、雪中田植え。お昼にお雑煮をいただいた後は小正月のお話と廿日灸、かまくら参り、塞道焼きを行います。（詳しくは酒田市広報1/1号にて）

問 酒田市平田総合支所地域振興課
☎0234-52-3910

白鉢巻をしめ、両手に蝋燭を持って沐浴。蝋燭を包む半紙の中に10円玉をはさみ、神社に奉納します。

〈お話を伺った方〉
千河原自治会長 **渡会光廣**さん
平成26年やや祭り 神宿代表 **柿崎寿一**さん

〈参考文献〉
『山形県の祭り・行事』山形県教育委員会
「東北の奇祭 やや祭り」余目町観光協会・余目町

庄内町
やや祭り

粉雪が静かに舞い降りる中、裸に腰蓑をつけ、冷水を浴びる少年たち。素足に履いたわらじで雪を踏みしめ、村内を一周した後、八幡神社へ参拝し、安産と無病息災、身体堅固を祈願します。

東北の奇祭として知られる「やや祭り」。かつては庄内町の千河原集落に伝わる年越し祭りとして、旧暦に合わせた1月16日に開催されていました。現在は諸事情により15日に近い日曜日に実施されています。全戸が二宮八幡神社の氏子という千河原集落は、5つの組に分かれています。事前の準備から当日の後片付けまで、行事を仕切るのはその年の当番組。当日は午前10時に子どもたちが抽選で行列の順番を決めます。午後1時になると、上は14歳から下は小学校入学前の子どもまで、呼び出しに従って一人ずつ公民館前の舞台で水をかぶります。そして集落内を回り、神社へ。その頃神社では、15歳以上の若者たちによるお百度参りが始まります。

水をかける時、たらいに水を汲むのは女の子の役目です。「一見するとやや祭りは男の子の行事に見えますが、もとは男児と女児の祭りだったんです。今は神宿も公民館を借りるし、行事も水かぶりとお百度参りだけですが、昔は男神宿と女神宿がそれぞれにあって、2日間いろいろな行事をしていたようですしの」と話すのは、平成26年に神宿代表を務めた柿崎寿一さん。かつては12～14歳の男女が祭りの夜にそれぞれの神宿に集まって、男子は裸になってわらこもつを棒状にしたもので打ち合い、女子は輪踊りをするという習わしがありました。お百度参りも今は略式ですが、前は100回する人もいたそうです。

千河原に伝わる大山守命の伝説

「やや祭りの由来は、よく大山守命（おおやまもりのみこと）伝説に絡めて語られるようですの」と語るのは、千河原自治会長の渡会光廣さん。昔、応神天皇の皇子・大山守命が悪臣の謀反によりこの地に逃れ、民家の産婦に匿われました。そのお礼として皇子は安産を約束します。その後、皇子は最上川の河原で討たれ、河原が血潮で赤く染まったことから「血河原」と呼ばれるようになり、千河原に。大山守命を安産の神とする二宮八幡神社が創建されました。またその時に皇子の遺言で7回分断された遺体は最上地方に葬られ、その地に七所明神が祀られました。「つまり、古事記とは異なる大山守命伝説が、千河原を含めたこの最上川沿いにあるわけです。でもこれは神社創建の話。祭りがいつどうして始まったかは、よくわからないです」と渡会さん。「それでもここに生まれた男の子にとって、祭りは宿命みたいなものですからの」と話す柿崎さんは、小学1年生から20歳まで15年間も水をかぶったそうです。

毎年祭りが近づくと、千河原の男の子はお風呂で水をかぶって体と心の準備を始めます。その子どもがいずれ行事を支える存在へと成長する。こうしてやや祭りが地域に受け継がれていきます。

「千河原に生まれた男の子は、誰もが水かぶりに参加します。辺りが真っ白になるほど吹雪く日でも、今まで風邪をひいたという子は一人もいませんね」。

※「わらこもつ」とは、稲わらをすくった時に出る茎以外の部分のこと。

（上）水かぶりをする子どもの後ろには、冠を掲げた父親が付き添います。（下）お百度参りには年齢の上限がないため、成人・結婚記念に参加する人もいます。

2015年行事日程

日時 1月18日（日） 水かぶりは午後1:00開始

場所 水かぶり、お百度参りの出発場所は千河原公民館（二宮八幡神社社務所、JR余目駅から約5km）。公民館を出て村内を一周した後、八幡神社に参拝する。当日は公民館で豆腐汁とお神酒の販売がある。

問 ☎0234-42-2922（庄内町観光協会）

特集 | Special Edition

庄内の小正月

遊佐町

遊佐のアマハゲ

山形と秋田を結ぶ遊佐町吹浦の「浦通り」と呼ばれる地区の集落に伝わる「アマハゲ」は日本の儀礼や信仰、年中行事の古来の形式を色濃く残す国の重要無形民俗文化財です。

〈お話を伺った方〉
遊佐のアマハゲ保存会会長 **髙橋透**さん

〈参考文献〉
赤坂憲雄・著『山野河海まんだら―東北から民俗誌を織る』筑摩書房
「遊佐のアマハゲ」遊佐町教育委員会

半農半漁の地に根付いた神を迎え、もてなす「祖霊信仰」の小正月行事

時季の節目に人の世に訪れ、幸せをもたらすとされる「来訪神」信仰は、世界各地に存在します。来訪神は主に仮面や異装をした〝目に見える神〟で、遊佐町吹浦に伝わる「アマハゲ」もその一つです。面をつけ、蓑を着て、家々を訪ね歩く振る舞いは、秋田県男鹿のナマハゲとよく似ていますが、その起源は定かではありません。

アマハゲはもともと小正月行事として、15歳の元服の年齢から25歳までの若者たちによって行われていました。現在は少子化のため高年齢化し、日取りも滝ノ浦が1月1日、女鹿が3日、鳥崎では6日と別々に行われています。「集落ごとにアマハゲの数も、面も所作も違います。昔から単一化されることなく、それぞれ独自の風習が伝えられてきたんです」と話すのは、全集落の保存会の会長を務める髙橋透さんです。

（上）アマハゲは女鹿が5体、鳥崎が3体、滝ノ浦が2体。
（下）神棚の前で餅とお神酒を献じる。ケンダン（蓑）から落ちた藁は「家に福を残す」として珍重される。

アマハゲの発祥は、最も古い面の状態から、江戸時代と考えられています。名前の由来は、囲炉裏に長くあたっていると手足の皮膚にできる「火だこ（火斑）」をナマミやアマミなどといい、これを剥ぐという意味合いで、家の中で火にあたってばかりいないよう戒める語意があると伝えられてきました。しかしこの由来もやはり通説の域を出ません。「同じような行事が全国にありますが、特に日本海沿岸に多く見られます。ここは昔から半農半漁の集落でしたから、稲作の儀礼行事である小正月にアマハゲが訪れることは、豊作への願いと切り離せないと思います」。

アマハゲが家々を訪れるのは、

家族の一心の願いを受け止め新年を言祝ぐ神の使者

夕暮れから夜にかけて。昼過ぎになると男性たちは集落の鎮守社に集まり、神前にお酒を供えて、面開きの神事を行い、ケンダン（蓑）をつけて出発します。太鼓打ちや鈴振りを含む一行は、家の前に着くと入り太鼓で来訪を告げ、面をつけた者だけが家の中に入ります。「アマハゲたちが歩き回ると、子どもたちは泣きわめいて逃げ出しますが、お年寄りには肩を揉んであげるしぐさも見せます。その後で、家長と新年の挨拶をして神棚を拝し、お神酒とお餅をいただいて戻り太鼓と共に去っていきます」。アマハゲは一見、畏怖を与えるように思われがちですが、家族らはその存在を丁重に迎え、もてなし、送り出すという慣習から、むしろ来訪は喜ばれるべきものであると考えられます。「アマハゲはこの小さな集落に残った、県内で他にない行事だという自負があります。今後も続けていくためにまずは集落を維持し、みんなの励みになるよう、このアマハゲを外に発信して、光を当てていきたいです」。

家々の幸せを願い、祝うために折々に訪れるアマハゲのような異形の神を、民俗学者の折口信夫は「まれびと」とし、信仰の対象としました。

全国各地に残る来訪神の民俗行事。「私たちの集落では、稲作の儀礼行事である小正月に豊作を願ってアマハゲを迎えたのだと思います」。

2015年行事日程

日時
日程は毎年同日、アマハゲが鎮守社を出る時間は下記の通りです。

場所
1月1日　滝ノ浦（大鳥神社）18:00〜18:30頃
1月3日　女鹿（八幡神社）17:00頃
1月6日　鳥崎（三上神社）19:00頃

かつては中学生までの男の子行事でしたが、現在は女の子や高校生も参加。20～30戸を町内会ごとに一軒ずつ回るため、半日がかりで勧進します。

〈お話を伺った方〉
清川塞の神保存会会長 **齋藤満**さん

〈参考文献〉
『写真で見る清川の塞乃神』清川塞の神保存会
『道祖神の源流』川崎市市民ミュージアム
『山形県の祭り・行事』山形県教育委員会

庄内町 塞の神

最上川と立谷沢川が合流する地点にある集落、清川では、道祖神信仰にもとづいた昔ながらの小正月行事が正月3日に行われています。

〈ござた、ござた、ここねの旦那様、千石、万石、五千石…

毎年1月3日になると、庄内町清川の町内に太鼓の音が鳴り響き、「デグサマ」と呼ばれる人形を抱えた子どもたちが唱えごとをしながら家々を勧進します。昔からこの地に伝わる「塞(さい)の神」です。

もともと庄内地方では昭和10年代まで、小正月行事として塞の神が各地で行われてきました。しかし戦後の社会変化に伴ってやめるところが増え、残っているのは清川と鶴岡市羽黒町手向など限られた地域です。「塞の神は、村はずれに祀った道祖神が厄災から村を守ってくれるという道祖神信仰からきているものです。特に清川は、最上川舟運の要所で人の出入りが激しい村だったから、余計にこの行事が大切にされてきたんだと思います」と話すのは、「清川塞の神保存会」会長の齋藤満さんです。

10の町内会ごとに進められる塞の神

現在、清川では10の町内会がそれぞれに道祖神を持ち、行事を進めています。前日、各神宿に集まった子どもたちはデグサマに着物を着せ、帽子や太鼓を準備。当日は神宿での祈祷後、道祖神の石祠を参詣し、歓喜寺に行ってから町内会の家々を訪れ、唱えごとを歌い、寄進を受けます。その後は神宿で会食し、来年の神宿に当渡しをして終了です。「私の親の時代は1月14、15日の2日間が本番で、準備も合わせれば1週間くらいしたそうです。私の頃は子どもがたくさんいたもんだから、小さな子は簡単にデグサマが持てなくての。今は子どもが少なくて続けるのが大変だけど、昔、唱えごとの表現が問題になってやらない年があったら、火事が起きたり悪病が流行ったりしたらしくての」。

「村はずれに祀る道祖神は、厄災や悪病から村を守ってくれる神様です。清川は最上川舟運の要所で人の出入りが激しい村だったから、余計にこの行事が大事にされてきたんだと思います」。

ふるさとの行事を守る保存会の役目

そんな清川で保存会が発足したのは平成元年のことでした。発起人の一人だった齋藤さんも、写真やビデオによる記録から太鼓の叩き方や道具の作り方指導まで、先輩たちと一緒に精力的に活動。平成3年には川崎市市民ミュージアムの「東日本道祖神展」に招かれて、デグサマを出展しました。その際、専門家から清川の塞の神の独自性を評価されたことで、保存会はさらに活動の意義を再認します。現在は、神宿となる家に負担がかからないよう新たなルールを作るなど、組織的な維持活動を続けています。「道祖神展の時、我々も皆で清川から川崎に行って、会場で唱えごとと太鼓を披露したんです。その晩、会場に駆けつけてくれた関東在住の清川出身の人たちと懇親会をして、唱えごとを歌ったら、皆さん涙を流して喜んでくれての。それを思うと、やっぱりふるさとの行事は大事にしていきたいものですよの」。

(上) 身に付ける祭具はデグサマも帽子も町内会ごとに異なります。(下) 清川の中央にある道祖神の石祠。すべての町内会が最初に参詣に訪れます。

2015年行事日程

日時 1月3日(土)　勧進は午前9:00頃から

場所 出発場所は、南町・上荒宿・荒宿・新屋敷・裏町・本町・小市・川端・新町・駅前と幸町の各神宿。最初はどの町内会も清川全体の道祖神である石祠を参詣し、次に歓喜寺へ。その後、各町内に散らばって家々を回り、神宿に向かいます。

問 ☎0234-57-2082(保存会・齋藤)

庄内写真季行 21

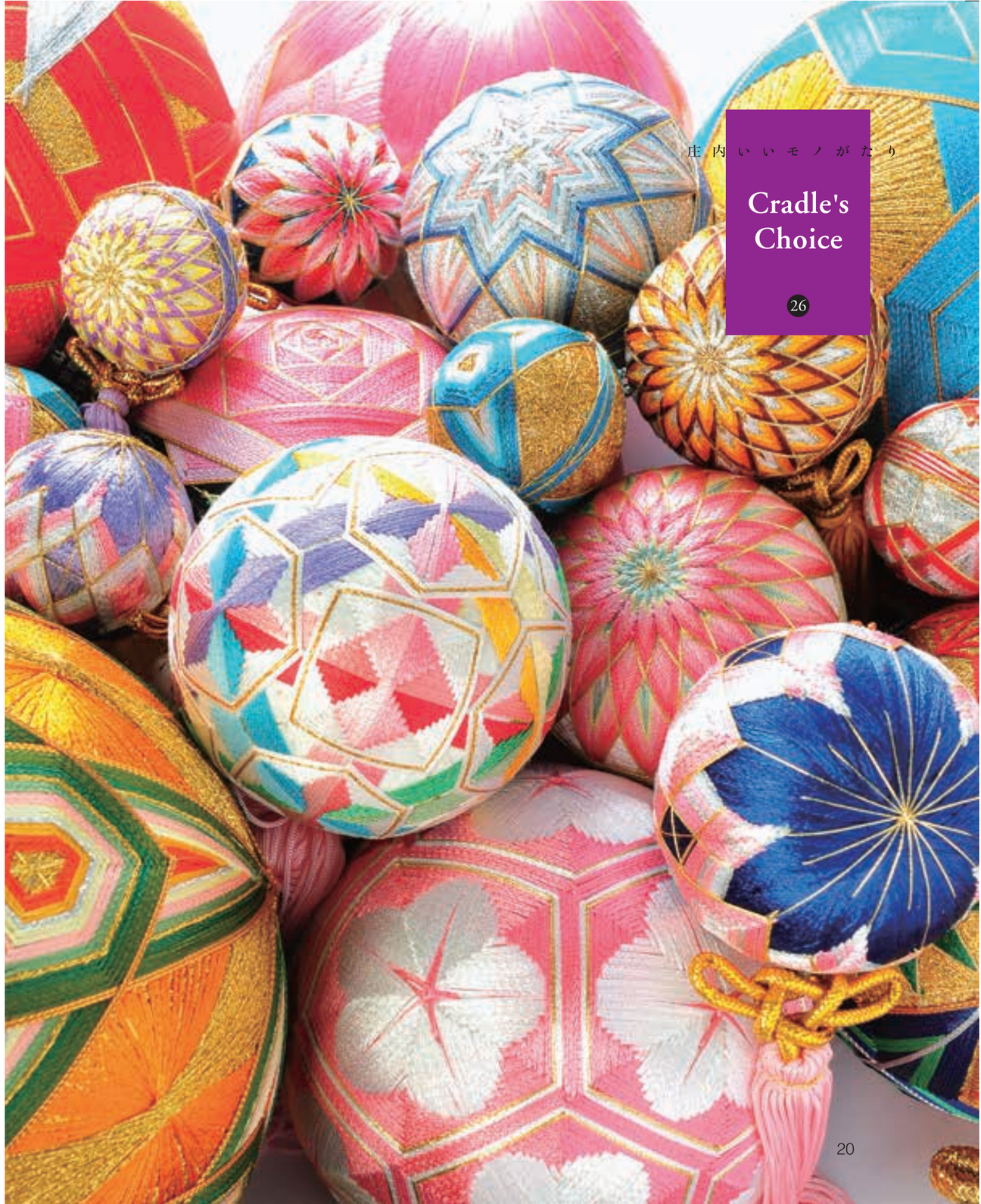
鳥海山 稲倉岳山頂直下

山に魅せられて、幾星霜。何十年来の付き合いになるが、その表情には一つとして同じものがない。

3月初旬、鳥海山はツアースキーの季節を迎える。私は今年も稲倉岳へと向かう。ブナの霧氷の路を過ぎ、頂上を目前にしたところに、私の見たい場所がある。稲倉岳の「岩氷」だ。この岩氷は、風の姿を生き写しにする。風に向かって伸びる造形は、毎年違った表情を見せる。この岩氷を撮るには、吹雪の後に晴れることが条件。条件が揃えば、吹雪の中でも突っ込んでいく。

風雪が象った自然美を、日差しが照らし出す、その一瞬にまた会いにゆく。

写真・文＝志田郁夫



庄内いいモノがたり

Cradle's Choice

26

城下町鶴岡の御殿まり

♪出羽の三山　日本海よ　おらが庄内米どころ
米のうまさと心のよさが　綾に育てた御殿まり
どんどや鶴岡　郷土自慢の御殿まり
―「御殿まりの歌」結城ふじを作詞、井上幸助作曲

城下町鶴岡の伝統工芸品「御殿まり」。そのあでやかで、めんこい姿は見る人の頬をほころばせるが、その製作過程は地道だ。まずもみ殻を袋に入れ、白い糸で丸くなるまでひたすら巻く。そして模様のベースとなる糸で白糸が見えなくなるまでまたひたすら巻く。ここまでで半日以上。それから作りたい模様に合わせて地割を施し、彩色糸で一針一針縫っていく。基本の模様は20種類。模様によって針の通し方がすべて異なるため、初心者なら少なからず戸惑ってしまうだろう。

この高度な手仕事は、江戸中期から全国各地の奥女中や武家婦女子の間で広まった。単調で閉鎖的な暮らしの中で技を高めることが喜びとなったのか、手まりは次第に遊具から芸術性の高い観賞品となっていった。鶴岡の御殿まりも同様である。しかし明治に入り、鶴岡ではこの手仕事がわずか一部の旧藩士家に伝えられるのみになった。そんな昭和30年代、忘れ去られていた御殿まりに光があたった。市内在住の上野富美さんが、祖母が作った御殿まりを頼りに見事再現に成功したのだ。その美しさと愛らしさは評判を呼び、「御殿まりの歌」までが誕生、郷土の誇るべき手仕事として多くの人に愛でられ、作られるようになった。

しかし現在、御殿まりの作り手は、上野さんの孫にあたる市川由喜さんと他数名しかいなくなった。扱っているお店も少なくなり、地元でも手に入りにくくなった。つまり再び途絶えてしまうかもしれないのだ。北国の雪深い環境の中で、鶴岡の女性たちが何百年もかけて根気強く作り上げてきた郷土の文化遺産に、新たな光を！

上野富美さんが昭和35年に開設した「上野御殿まり教室」（鶴岡市本町1丁目）は現在、市川由喜さんが主宰。販売の他、御殿まりづくり体験も開催している。体験料は500円から。所要時間はサイズや模様の難度によって異なり、直径4センチの1号サイズなら30分から1時間程度。電話にて要予約。
販売は「クレードルショップ」にて。

上野御殿まり教室　0235-22-8140

庄内俳句紀行

冬天の善寶寺を歩く

北国で暮らしていると、根雪になるなぁと思う日がある。白さを残して融け残る雪が「友待つ雪」。「友待つ雪」の上に降り積もる雪を「雪の友」が後から続き、降り積もればやがて根雪となる。

龍王殿

鶴岡市中心部から湯野浜温泉に向かう途中、1975年に廃業した庄内交通湯野浜線の善宝寺駅がある。今はひっそりと一車両のみが佇む。かつての賑わいを想わせる駅を背に、寒に入り、まさに根雪になろうと降る雪の中、歩を進めた。

微かなる音を降らせて今朝の雪　―あべ小萩

善寶寺は、平安時代の頃に『今昔物語集』にも登場する妙達上人がこの地にわたり、草庵を結んで「龍華寺」としたのが始まりといわれている。室町時代に曹洞宗の太年浄椿禅師が寺屋を建立。山号を龍澤山、寺号を善寶寺と改めた。

総門に面する参道の入り口に立つと、鮮やかなおべべを着た大きなお地蔵さんが出迎えてくれる。真っ直ぐにのびる道先に山門と石段を望み、総門をくぐり見上げれば、誰もがその敬虔な美しい彫刻に目を奪われるだろう。

五重塔五重の軒の氷柱かな　―佐藤やよめ

参道の左手には、洋風建築家である名匠高橋兼吉作の美しい五重塔がそびえる。これは明治時代にわが国唯一の「魚鱗一切の供養塔」として建立されたものだ。

積もったばかりの雪が、屋根の優しい曲線を白色になぞる。普段は静かな境内も、お正月の初詣には出店が並び、北海道や東北、北陸の漁業関係者をはじめ、各地から大勢の参拝客が訪れる。

山門をくぐると、左に韋駄天像、右に毘沙門天像が勇ましく立ち、時を忘れて思わず見入ってしまう。

五重塔

龍王殿の簷あかあかと雪催ひ　―あべ小萩

行く先は急な石段となる。頂の見えない斜面を登りきると、眼前に薬師如来像を祀る本堂が、荘厳な佇まいで現れた。

さらに奥へと足を延ばすと、鉛色の冬空に、極彩色の煌びやかな龍王殿が目に飛び込んでくる。簷の朱、竹林の緑と雪の白が、水墨画の世界に色を添える。静けさの中、竹林から落ちる雪の音が境内に谺する。

寒念仏聞えくる夜や柱割れ　―土岐包泉

龍王殿の簷に見惚れていると、木鼻の獏と獅子と目が合った。一瞬、息を飲む。木鼻とは、建物の横木が柱から突き出た部分の装飾をいい、その力強さ繊細さは場所によってまったく違う。

善寶寺の奥の院には、二頭の龍が身を潜めているという「貝喰みの池」がある。この池では、二月の立春に一年間で一番きれいな浄水を汲み上げ仏様に献上する「お水取り式」が行われる。このお水取りが行われると、まだ長い庄内の冬にも春の気配を感じるようになる。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

木鼻の獅子

龍王殿と竹林

山門